

THE GRANPHONIC CONCERT 8th

グラントフォニック 第8回定期演奏会

2008年5月6日

愛知県芸術劇場コンサートホール

ご挨拶

本日はゴールデンウイーク最終日にもかかわりませず、グランフォニック第8回定期演奏会に多数ご来場いただき、誠にありがとうございます。

グランフォニックは一年半間隔で定期演奏会を開催しております。前、第7回定期演奏会では畠中良輔、伊藤京子両先生をお招きしました。そしてその興奮冷めやらぬうち、これまた大御所の「炎のマエストロ」小林研一郎先生を今回の客演指揮者としてお迎えすることが決まり、団員一同身の引き締まる思いで練習に励んでまいりました。小林先生の練習は、指揮の合間に自らピアノを弾き、自ら歌って範を示される等極めて密度が濃く、且つわかりやすい表現でご指導頂きました。一方グランフォニック商事の社員は先生の音楽を少しでも吸収しようと懸命なる努力を重ね、社員一同にとって貴重な体験となりました。

また、今回は総合演出を気鋭の右來左往(みぎき さおう)さんにお願い致しました。特に「おとこはおとこ」のステージでは脚本作りから始まり、演技のための基本ワークショップ等これまたグランフォニックにとって新しい体験をさせていただきました。このステージでは原作(原曲)に手を加えたグランフォニックバージョンでお聴きいただきます。

「花筐(はながたみ)」のステージでは既存の日本歌曲に加え、昨年度の奏楽堂歌曲コンクール中田喜直賞部門で優秀賞を受賞いたしました、当団指揮者の向川原慎一の作曲による「少女と雨」を演奏いたします。

本日はオンリーワン路線を行くグランフォニック商事のオリジナリティ一たっぷりのステージを最後までお楽しみ下さいませ。

グランフォニック団長 田中良夫



総合演出 右来左往

男声合唱による日本歌曲集
花筐 (はながたみ)

1. 花 作詞 武島羽衣
作曲 瀧廉太郎
編曲 なりたまさと
2. からたちの花 作詞 北原白秋
作曲 山田耕筰
3. 少女と雨 作詞 中原中也
作曲 向川原慎一
4. くちなし 作詞 高野喜久雄
作曲 高田三郎
5. 桜と雲雀 作詞 室生犀星
作曲 清水脩
6. 舟唄～片戀～ 作詞 北原白秋
作曲 團伊玖磨

2~6 編曲 向川原慎一

指揮 向川原慎一
ピアノ 早瀬洋子

男声合唱組曲
「月光とピエロ」

作詞 堀口大学
作曲 清水脩

1. 月夜
2. 秋のピエロ
3. ピエロ
4. ピエロの嘆き
5. 月光とピエロとピエレットの唐草模様

指揮 小林研一郎

落語による男声合唱組曲

おとこはおとこ

作詞 阪田寛夫
作曲 大中 恩
編曲 向川原慎一

1. プロローグ
2. 第一舟唄
3. 東西なぞなぞ合戦
4. 夜ふけて女の歌える
5. 売り言葉に売り言葉
6. 第二舟唄
7. おとこはおとこ

旅の女 伊藤高潤
語り 永井一美

指揮 向川原慎一
ピアノ 早瀬洋子
池谷府希子

男声合唱とピアノの為の
さすらう若人の歌

作曲 Gustav Mahler
編曲 福永 陽一郎

1. Wenn mein Schatz Hochzeit macht
彼女の婚礼の日は
2. Ging heut' Morgen übers Feld
朝の野原を歩けば
3. Ich hab' ein glühend Messer
燃えるような短剣をもって
4. Die zwei blauen Augen von meinem Schatz
彼女の青い目が

指揮 小林研一郎
ピアノ 早瀬洋子

男声合唱による日本歌曲集 花筐（はながたみ）

花筐（はながたみ）とは竹で細かく編んだ花籠のこと、世阿弥の作った能（謡曲）の演目としても知られていますが、このステージは、花を題材とした曲を選びすり、とりどりの日本歌曲の花筐をお楽しみ頂こうと編纂された、グラソニックのオリジナル男声合唱曲集です。

1. 花

100年以上も前に書かれた芸術性の高い日本歌曲の発祥であり、しかもこれからも永遠に日本人の心に残るであろう瀧廉太郎の名曲です。組歌「四季」の第一曲で、春の風物＜桜＞と隅田川の取り合せが目に浮かぶように、やわらかく優美な旋律が流れていきます。（この男声合唱編曲は2002年第4回定期演奏会の再演）

2. からたちの花

詩人北原白秋と作曲家山田耕筰のコンビは、日本人の心情を日本語そのままの形で音楽にして数々の名曲を残しました。まるで朗読しているようにイントネーションとメロディーが同化していく、ドイツマンの香りと日本情緒が見事に融合しています。この曲は大正14年の作で、山田耕筰は自分が厳しい労働をしなければならなかつた幼い頃＜からたち＞の垣根でつかの間吐息をついた、という想い出によって出来た曲だと述懐しています。

3. 少女と雨

詩は30才で夭逝した中原中也の最晩年の作品。雨に煙る校庭にたたずむ少女と花畠で濡れそぼる＜菖蒲＞の花が詩人の内でデフォルメされ、それ以外の世界が一瞬消えてしまったかのような不思議な感覚を詠っています。作曲の向川原慎一は2007年の奏楽堂日本歌曲コンクールで中田喜直賞を受賞。この曲は本日初演作品です。

4. くちなし

高野喜久雄と高田三郎は日本合唱界で知らぬ人のない程有名な「水のいのち」の作者コンビですが、この曲も二人の協働による6曲「ひとりの対話」という歌曲集の終曲です。何気ない日常生活の中で、父の思い出そのもののくくちなしを題材にしながら、自己をみつめ対話する中に深い精神性を求める、静かでしかも内面的には烈しい高田音楽の世界が広がっていきます。

5. 桜と雲雀

本日第2ステージで演奏する「月光とピエロ」の作曲者でもある清水脩は、安易なリリズムに陥らぬ孤高の作風を特徴としていて、高村光太郎の詩による「智恵子抄」が彼の歌曲の代表作となっています。この「桜と雲雀」は室生犀星の詩による抒情小曲集の一曲ですが、早いテンポの5拍子が、はらはらと散る＜桜＞の花びらと不規則に飛び回る雲雀の様子を彷彿とさせます。

6. 舟唄～片戀～

この詩（片戀）は、北原白秋が明治末期の東京を描いた「東京景物詩」という詩集にありますが、オペラ「夕鶴」の作曲で名高い團伊玖磨は、詩の中の曳舟（ひきふね=実は東京墨田区の地名）という言葉にインスピレーションを得て作曲し、舟唄というタイトルをつけてしました。こんな微笑ましい勘違いがあったとはいえ、情感細やかなメロディーと流麗なピアノパートによって＜アカシア＞の花びらの散る様と片想いの心情が見事に表現され、若き團伊玖磨の才能がほとばしる日本歌曲の傑作となりました。

本日は、このように独唱用に書かれた歌曲を、男声合唱でお聴き頂くわけですが、本来これらの曲の持つ素晴らしさを損なわない事はもちろんのこと、それ以上に、男声合唱ならではの表現によって、新たな別の魅力を引き出すことが私たちの狙いです。どうぞじっくりお楽しみ下さい。

男声合唱組曲 月光とピエロ

堀口大学の第一詩集「月光とピエロ」は、1919年（大正8年）1月、自費出版により刊行された。詩集には79篇の詩が収められている。完成には、大学が19歳であった1911年から1918年までの7年間が費やされた。この間大学は、外交官であった父に従い、日本、ハワイ、メキシコ、日本、ベルギー、スイス、スペイン、日本と転居を繰り返している。このうち、ハワイでの2ヶ月間は療養に専念した。メキシコに向かう船中で結核を発病したのである。昭和56年に89歳の生涯を閉じた大学であったが、さすがにこの時は死を意識した。「はたち代、私はあせった。ほど近い自分の最後の時を待ちながら、せめて1行でも多くの詩を書き残そうと」。昭和51年に新版として刊行された「月光とピエロ」のあとがきで、当時をこう振り返っている。

詩集の中の一連のピエロの詩は、「秋とピエロ」の総題下、1915年1月にスペイン・マドリードから日本に送られ、雑誌「スバル」から初出された。この時大学23歳。女流画家であり詩人としても既に著名であったマリー・ローランサンとの交友を深めていた。9歳年上であった人妻との実らぬ恋であった、とも伝えられている。詩のなかに登場する「コロンビイヌ」が、古典劇のなかで常にピエロが恋焦がれては失望を繰り返す対象であることと無縁ではあるまい。おそらく「コロンビイヌ」はローランサン、「ピエロ」は大学自身である。

「ピエロの悲哀」を表した詩は、30年余りを経て、作曲家・清水脩の目に留まる。男声合唱曲に身を変えた「秋のピエロ」は、昭和23年、第一回全日本合唱コンクールの課題曲となつた。翌年、東京男声合唱団のために残りの4曲が加えられ、わが国最初の合唱組曲「月光とピエロ」が誕生するのである。昭和合唱ブームの始まりであった。

「秋のピエロ」が産声をあげてから、今年でちょうど60年。還暦を迎ようとしている「ピエロ」だが、今でも毎年のように日本のどこかで歌い継がれている。合唱、とりわけ男声合唱に情熱を持たれる方であれば一度は会場でお聴きになったことがあるのではないか。自ら舞台で演奏された方もたくさんおみえであろう。

広く親しまれてきた曲ではあるが、演奏する側としてはなかなかの難曲。音域は広く、和声も自在に展開し、主旋律が各パートを駆け巡る。合唱団のレベルがすぐに分かってしまう曲と言っても過言ではない。

今宵、グランフォニック単体として初めて挑む「名曲」である。わがメンバーの中には、「ピエロ」の年齢を超えるツワモノも多い。コバケン先生のご指導のもとどのようなピエロを演ずることができるのか、われわれとしても楽しみである。

身すぎ世すぎのは非もなく
おどけたれどもわがピエロ
秋はしみじみ身にしみて
　　眞実涙を流すなり

落語による男声合唱組曲 おとこはおとこ

私たちはこれまで毎回ミュージカル風の男声合唱組曲を演奏しており、第1回から第5回までは団員の創作曲、第6回と第7回は海外の有名なオペレッタとミュージカルでした。今回は、多くの名曲を生み出した阪田寛夫と大中 恩の名コンビが上方落語の大作「三十石」をもとに作詞・作曲した作品です。

時は江戸時代、京から浪速（なにわ）に向かう旅人たちが、船の上で繰り広げるばかばかいお話です。その頃の旅も今と同じで、人々の大きな楽しみでしたが、街道をテクテクと歩くのが基本で、乗り物に乗ろうとすると駕籠（かご）か馬、そして、場所によっては船がありました。

船といえば、琵琶湖に源を発し大阪湾に注ぐ淀川には、「三十石船」と呼ばれる定期船が運行されていました。これは米が三十石積める大きさからきた呼び名で、全長五十六尺（約17m）、幅八尺三寸（約2.5m）、はじめの頃は定員が28人、船頭は4人と決められていました。京と浪速の間は全長十一里（約45km）で、浪速に向かう下りの船は川の流れに乗り、わずか6時間で着きました。今の新幹線のようなもので、京都見物をした人が足を伸ばして浪速まで行く場合、あるいは浪速から京へ来た人が帰るときによく利用したそうです。通常は夜半に京の南部、伏見にある寺田屋の浜を出て早朝、浪速の八軒家（今の天満橋付近）に着くというダイヤで宿代が要らないことから、大いに繁盛したそうです。

この船には、浪曲で有名な森の石松、幕末には坂本龍馬をはじめとした勤皇の志士たちも乗っています。

さて、寺田屋の浜では、京見物を終えた東（あずま）の男たちや京から戻る浪速の男たちが三十石船に乗り込むと、ほぼ満員。最後の客がご婦人だと聞いて、男たちが何とか乗せようとしていますが、実はおかわ（携帯トイレ）を持ったお婆ちゃんだと分かって一騒ぎするうちに、船は出発します。

船頭の舟唄につれて川を下ってゆくと、船の中ではあずまの男となにわの男が東西に分かれて「いろは」の謎々合戦で大騒ぎ。「いろはの『い』の字と掛けて『炉（ろ）』の上」や「いろはの『ろ』の字は『歯（は）』の上」といった調子。そこに粹な旅の女が現れると、彼女をはさんで東西の名物の売り込み合戦にエスカレートしますが、やがて疲れて寝込んでしまいます。「ここは大阪、八軒家！」という舟唄で眼を覚ますと、これは大変……！！

女白浪（おんなしらなみ—女のスリ）にいっぴい食わされた男たちも、最後にはおかしさ、悲しさ、切なさを感じながらも、「世界の男よ、肩を組んで行こう！」と声高らかに歌います。

ちなみに、この曲は1966年に同志社グリークラブのOB団体、クローバークラブの委嘱により作曲され、初演されました。

男声合唱とピアノの為の さすらう若人の歌

若き日、カッセル歌劇場副指揮者だったゲストフ・マーラー（1860-1911）は、ソプラノ歌手ヨハンナ・リヒターへの失恋を体験したが、その青春の心の傷が歌曲集「さすらう若人の歌」を生み出した。歌曲集創作への熱意は、4曲の詩が作曲者自作のものであり、後に交響曲第1番がこの歌曲集と不即不離の形で作曲されたことを見てもわかる。マーラーの愛弟子で名指揮者ブルーノ・ヴァルターは交響曲第1番を評して「マーラーのヴェルテル」と言ったが、その意味はこの歌曲集を聴き、歌うことでもよく理解される。

第1曲 愛しい人が嫁ぐ日は

愛しい人が嫁ぐ日、楽しげに他所へ嫁ぐ。それは自分にとっては悲しみに満ちた日。暗い部屋にこもってあの人のことを見て泣く。

青い花よ、枯れるなよ。この世はなんと美しいのかと鳥が歌う。

けど、鳥よ歌うな、花よ咲くな、我が春は去った。日暮れて床に就けば、思いは悩みと苦しみばかり。

第2曲 朝の野辺を歩くと

朝の野辺を歩くと、葉に宿る朝露、陽気な鳥のさえずり。釣鐘草も小さな鈴を鳴らす。いい日になりそうだね、すばらしい日だね。陽の光の下、この世の全てがきらめき、声を上げ、美しい色にかがやく。花も鳥も、大きいものも小さいものも。なんて素敵なものなんだ、ね。

こんな中で、自分の幸せもまた始まるのか。否、否、よく解っていることだ、自分の人生に花が咲くなんて、あるわけがない。

第3曲 胸の内には灼熱の短剣が

灼熱の短剣、そう、燃えるような短剣が自分の胸を深く、深くえぐっている。全ての喜びの中に、全ての楽しみの中に、深く刺さっている。なんという苦しみ。ああ、悪い客人だ。短剣は休むことなく、憩うことなく、昼も夜も、自分が寝ているときでも自分を苦しめる。

空を仰げばふたつの青い瞳。野を歩けば風にそよぐブロンドの髪。ああ、なんという苦しさ。夢から覚めればあの人の澄んだ笑い声が聞こえる。ああ、ああ。

いっそ自分が黒い棺に横たわり二度と目覚めることができないのに。

第4曲 愛しい人の青い瞳が

愛しい人の青い瞳が自分を大好きなこの地から見知らぬ世間へと追い立てた。青い瞳よ、どうして見つめるのか。自分に有るものは永遠の悩みと苦しみばかりだ。

静かな夜、暗い荒れ野を越えてこの地を去った。さようならと言ってくれる人もなく。我が道連れは愛と悩み。

道の端に立つ菩提樹、その下でやっと安らぎ眠った。雪のように花を散らす菩提樹、その下で世の仕打ちを忘れた。全てが、そう、全てがまた良くなった。全てが、何もかもが、愛も悩みも、世界も、夢も

小林 研一郎：指揮
Kobayashi Ken-ichiro

東京芸術大学作曲科・指揮科を卒業。第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞受賞。

世界中の数多くの音楽祭出演の他、欧州のオーケストラを多数指揮。ハンガリー国立交響楽団音楽総監督をはじめ、日本フィルハーモニー音楽監督など国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。ハンガリー政府よりリスト記念勲章、ハンガリー文化勲章、民間人最高位の"星付中十字勲章"が授与されている。CDはクタヴィア・レコード他から多数発売されている。

著書に「指揮者のひとりごと」。1999年には管弦楽曲「パッサカリア」を作曲。同年オランダで初演され大好評を博した。2002年にはプラハの春音楽祭オープニングコンサートを東洋人として初めて振るなど、最も活躍し注目されている指揮者。現在、アーネム・フィルハーモニー常任指揮者(オランダ)、ハンガリー国立フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、マタヴ・ハンガリー交響楽団、九州交響楽団の首席客演指揮者、東京芸術大学教授、東京音楽大学客員教授を務める。



右来左往：総合演出
Migiki Saou

劇作家・演出家。

1962年生まれ。愛知県一宮市出身。劇団パノラマ

☆アワー主宰。

第5回テアトロ・イン・

キャビン戯曲賞、平成4年度文化庁舞台芸術創作奨励特別賞、第1回日本劇作家協会新人戯曲コンクール受賞。平成9年度京都市芸術新人賞、第2回尾宮賞受賞。

青少年たちを主人公にした舞台作品および児童を含む市民参加の演劇公演の指導、作・演出などで高い評価を得ている。



向川原 慎一：指揮
Mukaigawara Shinichi

早稲田大学第一政治経済学部卒業。長年にわたり合唱指揮・指導を行い、現在はグランフォニック

をはじめとしていくつかの団体の指揮者。そのかたわら、歌曲を中心とした作曲活動を続け、2007年の奏楽堂日本歌曲コンクール・第15回作曲部門(中田喜直賞の部)では2曲が本選に進み、優秀賞と入選を得た。また合唱編曲では2008年4月カワイ楽譜から「混声合唱のための5つのトスティー歌曲」が出版され、「ドボルジャークのジプシーの歌」が近々出版予定。小林研一郎氏に師事。



早瀬 洋子：ピアノ
Hayase Yoko

愛知教育大学音楽科、同大学院修了。

学生時代より、名古屋二期会、名古屋オペラ協会、名古屋市文化振興事業団、

愛知県文化振興事業団、三重オペラ協会、岐阜県産業文化振興事業団、名古屋芸術大学、長久手オペラレクチャーコンサートなどで多数のオペラ、オペレッタ、ミュージカルの稽古ピアニスト、コレベティトゥア、ピアノ公演ピアニストを務める。

栗原一身氏、平尾はるな氏、山崎晴代氏、三浦洋一氏らに師事。

伴奏ピアニストとして活動する傍ら、名古屋芸術大学では長年にわたり、学部や大学院のオペラの授業助手を担当。また、名フィルの指揮法アシスタントや地域のコーラス指導もしている。



池谷 府希子：ピアノ
Ikegaya Hukiko



名古屋芸術大学音楽部器楽科ピアノコース卒業。滝内須磨子、故伊藤睦子、河原元世の各氏に師事。ワルター・ハウツィッヒ公開レッスン受講。室内楽のタベピアノデュオコンサート、卒業演奏会、新人演奏会、エクセレント・アーティスト・コンサート（東京）出演。国際芸術連盟第2回JILA音楽コンクール入賞。弦・管楽器・声楽等の演奏会の伴奏、アンサンブルなどの活動を行う。<トリオ・ディ・パッシオーネ>、<デュオ・カレドニア>の各メンバー。名古屋芸術大学実技補助員。

グランフォニック

本日はようこそそのお運びで厚く御礼申し上げます。さてさて、ワテラ「グランフォニック」の定期演奏会も、回を重ねて第八回を迎えることとなりましてな。確か、1994年に好きもん同士が集まってから14年、やっとこさ迎えた第一回の定期演奏会から数えても10年の時が流れたんですね。その間、メンバーは60人を越え、歳も20代の兄さんから70代のご長老まで、なんともにぎやかなもんでございます。もちろん、みんなこっちが本業で、まあなかなか芸では食えんさかい、したかのお副業でいろんな商売をしております。いわゆる「バイト」言うんですかな。ま、ご隠居の連中はもうこっちばっかりですけどな。

ワテらこう見えても結構こだわりがありまして、「歌を通じて生きる喜びを感じ、伝えること」だけは続けて行きたいと思うてます。カッコええでっしゃろ。まあ、みんな馬鹿ばっかりやっておりますが、もっとじょうずになりたい思うて、一生懸命稽古だけはしてまいりました。今日は「小林研一郎」はんちゅう、そりゃもうごつつい先生をお呼びして、これまで以上にきばって歌いますさかい、しまいまでよろしゅうお付き合いのほどおたの申します。

最後に「グランフォニック」とかけまして、「味はいいが売れない不揃いの野菜」ととく、そのころは「見栄えは悪いが肥え（声）はいい」。おあとがよろしいようで。

浅井 裕之 伊藤 高潤 岡本 達幸
鹿住 誠 片田 保彦 神谷 立正
小林 武 佐々木正義 鈴木 英孝
田中 良夫 常川 浩 早矢仕英史
藤田 東一 三ツ松 平 向川原慎一
山下 純也

T1

新谷 岳史 飯田 公男 井上 恵太
石井 清 伊東 健光 大浦 亮一
黒田 泰男 小林 信夫 佐藤 正
柴田 道昭 永井 浩敏 中村 嘉夫
本多 一義 間瀬 讓 三ツ口勝弥
森重 雅夫 吉居 清

T2

伊藤 慎二 神田 久嗣 木全 和明
芝木 昌一 土岡 一郎 寺島 正晃
永井 一美 中田 聰 長谷川利孝
早澤 信昭 弘瀬 嘉夫 細江大喜雄
水野 邦明 安田 俊哉

B1

浅井 良之 浅田 宏 浅野憲一郎
稻熊 裕之 犬塚 弘道 井ノ口貴敏
小島 聰 外村 俊夫 富田 敏夫
林 和宏 福澤 廉太 藤山 祐司
古田 和則 間瀬 裕士 松原 成憲
村井 襄介

B2

花

春のうらゝの隅田川
のぼりくだりの船人が
櫂のしづくも花と散る
ながめを何にたとふべき

見ずやあけばの露浴びて
われにもの言ふ桜木を
見ずや夕ぐれ手をのべて
われさしまねく青柳を

錦おりなす長堤に
くるればのほるおぼろ月
げに一刻も千金の
ながめを何にたとふべき

からたちの花

からたちの花が咲いたよ
白い白い花が咲いたよ
からたちのとげはいたいよ
青い青い針のとげだよ
からたちは畠（はた）の垣根よ
いつもいつもとおる道だよ

からたちも秋はみのるよ
まろいまろい金のたまだよ
からたちのそばで泣いたよ
みんなみんなやさしかったよ

からたちの花が咲いたよ
白い白い花が咲いたよ

武島羽衣

少女と雨

中原中也

少女がいま校庭の隅に佇んだのは
其処は花畠があつて
菖蒲の花が咲いているからです

菖蒲の花は雨に打たれて
音楽室から来るオルガンの
音を聞いてはゐませんでした

しとしと雨はあとからあとから降つて
花も葉も畠の土ももう諦めきつてゐます

その有様をジツと見てると
なんとも不思議な気がして来ます

山も校舎も空の下に
やがてしづかな回転をはじめ

花畠を除く一切のものは
みんなとつくに終つてしまつた
夢のやうな気がしてきます

くちなし

高野喜久雄

荒れていた庭 片隅に
亡き父が植えたくちなし
年ごとに かおり高く 花はふえ
今年は十九の実がついた

くちなしの木に くちなしの
花が咲き 実がついた
ただ それだけのことなのに
ふるえる ふるえる わたしのこころ

「ごらん くちなしの実を ごらん
熟しても 口を開かぬ くちなしの実だ」
とある日の 父のことば父の祈り

くちなしの実よ くちなしの実のように
待ちこがれつつ
ひたすらに こがれ生きよ
と父はいう 今も どこかで父はいう

桜と雲雀

室生犀星

雲雀ひねもす

うつらうつらと啼けり

うららかに声は桜にむすびつき

桜すんすん伸びゆけり

桜よ

我がしんじつを感じよ

らんまんとそそぐ日光にひろがれ

あたたかく楽しき春の

春の世界にひろがれ

舟唄～片戀～「東京景物詩」より

北原白秋

あかしやの金と赤とがちるぞえな

かはたれの秋の光にちるぞえな。

片戀の薄着のねるのわがうれひ

曳舟の水のほとりをゆくころを。

やはらかな君が吐息のちるぞえな。

あかしやの金と赤とがちるぞえな。

JASRAC（出）許諾第0804411-801号

グラントフォニック 第8回定期演奏会

演出：右来 左往

照明：吉戸 俊祐

音響：桑山 征宏

アナウンス：中田 裕子

（総合劇団俳優館）

S — t a f f

スタッフ

団長 田中 良夫

幹事長 細江 太喜雄

副幹事長 古田 和則

財務部長 常川 浩

広報 石井 清

顧問 三ツ松 平

パートマネージャー

(T1) 小林 武

(T2) 佐藤 正

(B1) 永井 一美

(B2) 間瀬 裕士

音楽スタッフ

指揮者 向川原 憲一

副指揮者 神田 久嗣

コンサートマスター 田中 良夫（兼）

楽典長 伊東 健光

クリエーティブ委員長 中田 聰

パートリーダー

(T1) 藤田 東一

(T2) 伊東 健光（兼）

(B1) 中田 聰（兼）

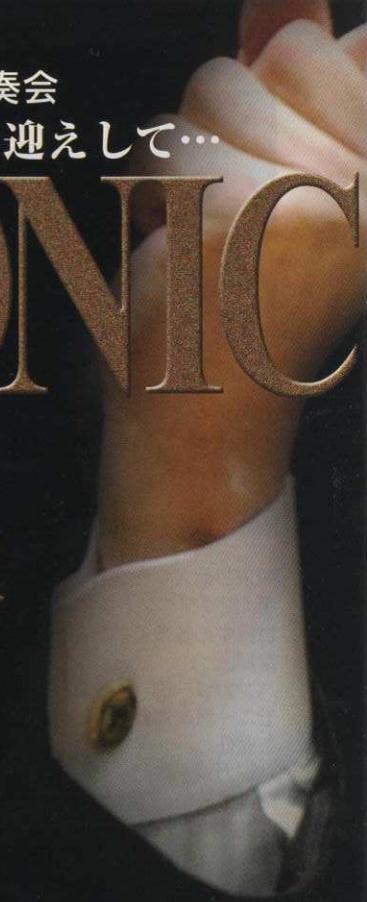
(B2) 浅井 良之

連絡先 細江 太喜雄 090-1244-2234

THE グランフォニック 第8回定期演奏会
GRANPHONIC CONCERT 8th

THE GRANPHONIC CONCERT 8th

グラソニック 第8回定期演奏会
客演指揮に小林研一郎氏をお迎えして…



客演指揮：小林研一郎

男声合唱とピアノの為の
[さすらう若人の歌]
作曲：グスタフ・マーラー
編曲：福永陽一郎

男声合唱組曲
[月光とピエロ]
作詩：堀口大学 作曲：清水 修

指揮：向川原慎一

男声合唱による 日本歌曲集
[花はながたみ 筐]

落語による男声合唱組曲
[おとこはおとこ]
作詩：阪田寛夫 作曲：大中 恩

2008
5.6 (火祝) 3:30pm 開場
4:00pm 開演
愛知県芸術劇場コンサートホール

指定席：2,500円 自由席：2,000円

協力：アルマ音楽企画

お問い合わせ：細江 tel:090-1244-2234

THE GRANPHONIC:<http://www.granphonic.com>

チケット販売：アルマ・チケットセンター／090-1236-1497（無料郵送サービスあり）

芸文プレイガイド／052-972-0430 ヤマハプレイガイド／052-201-5152

総合演出：右来左往
ピアノ伴奏：早瀬洋子